

表を附するなどの親切があり、事件の所々に支那社會の特質を匂はせ、時事問題を引きあひに出すなど素人をも一かどの支那通たらしめねば已まない熱意も、嬉しいもの、一つである。それでもなほ讀みにくいといわれる讀者があれば、その罪は一に支那の官名地名人名に歸せらるべきであらう。

題材の舊きが故に、行文の平易なるが故に、装釘の粗末なるが故に、輕視される事なく、史家はもとより、支那の姿を正しく理解せんとする一般人士に、廣く讀まれん事を切望して已まない。(四六判、本文一九〇頁、圖版四、別刷地圖一、昭和十四年十月、富山房發行、定價壹圓貳拾錢)〔堀井一雄〕

龍谷大學三百年史

龍谷大學は眞宗本願寺派の専門道場として最高の教育機關であり、大正十一年大學令によつて昇格し本願寺派の別名とも云ふべき龍谷の文字を用ひて校名となし、佛敎學眞宗學の攷究を以つて主なる目的とはするものの、餘外典をも兼學することによつて文科大學としての豊かなる内容を持ちながら、現に京都西六條の土地に宗門はもとより一般子弟の教育に従事してゐる大學である。

蓋し宗門教育の事は一派の基礎を確實ならしむる爲に早くより各宗派に於て試みられて居り、平安時代のはじめ最澄は山家學生式を制定して天台宗學の興隆をはかり、學府としての延暦寺は永く存續して、天文年間我國に來朝せるキリスト敎徒の目には「佛敎主義の大學」として強く映じて居る。空海が衆藝を兼練すべし

として開設した綜藝種智院はその形に於て現に各宗派がその教育機關として經營してゐる多くの宗門大學の先驅をなしてゐる。淨土宗日蓮宗の檀林も亦かゝるものであるが、本願寺のそれは寛永十六年本願寺廓内に創設された學寮を以つて其起源とする。やがて學林と改稱され幕末に及び、明治初年に一般學校の制に倣つて大敎校と改組し以後龍谷大學に迄發展し來れる事實よりすれば、昭和十四年が偶々三百年に相當し其紀念事業の一として龍谷大學三百年史と題されて本書が編纂されたのも蓋し當然の事と云はねばならない。

本書の編纂は龍大禿氏・西谷兩敎授顧問となり西光敎授編纂主任となり講師富崎・普賢兩氏これが執筆に當つた。何れも眞宗學眞宗史の學匠として知られた人々であり、従つて本書はよく同學の沿革を傳へるものとして貴重なものであるが、また眞宗本願寺派の學事史として前田博士の名著と共に高く評價されるべきものであらう。

然し本書のもつ價值は單にそれだけではない。近世宗敎文化史を考ふる上に多くの資料を提供してゐる。例へば宗學興隆の條について見るに、徳川幕府は法度によつて僧侶の世俗的行動を禁止して専ら學問研究に精進する事を強制し、以つて敎團人の關心を内部に向はしめる事に苦心し、一度宗論紛擾し來れば直ちにこれが關係者を處分し、時には校舎の破壊をも容易に斷行してゐるが、此事からは幕府が採つた宗敎政策の性質が明らかに窺はれよう。三業惑亂は功存が己が見解を以つて本宗の正當なる安心となし學

林の宗學も亦この方針によつて統制せんと企てた所に端を發するが、其處に宗學が所謂封建的教學たるべき性質を明瞭に示してゐる。或ひは幕末期に於て國學者の側よりの佛敎攻撃に對抗せん爲に學習の範圍を擴大して普通學をも兼學し、以つて時代の趨勢に對應せんとした努力等も興味多い事實であらう。

最後に龍大の本館は明治十三年明治天皇が行幸遊ばれた聖蹟であつて、現に史蹟の指定を受けて居る。これは龍大がその光榮を廣く天下に誇示したい一事である事を記して置きたい。(菊版九六〇頁、年表六〇頁、圖版十三葉、龍谷大學出版部發行非賣品)〔木村武夫〕

莊園の研究

中村直勝著

近時社會經濟史に對する關心が高まると共に、中世史の部門に於ては、種々の角度から莊園の研究が行はれ、それらの成果を上げつゝある。云ふまでもなく莊園の研究は、史料の忠實な採録を基礎とせねばならぬ。従つて莊園の研究に従ふものは、齊しく、まとまつた史料を収める東大寺文書、東寺文書、高野山文書等に注意を拂ふのである。就中、東大寺文書は、それが収める史料の量及び質に於て、他の追従を許さないものがあり、莊園の研究には缺くべからざるものである。併し乍らこの東大寺文書は、老大な通數に達する爲め、個々の論考に引用されることはあつても、全體を讀破し整理してまとまつた結果を出すことは、容易ならざ

ることであつた。こゝに紹介する「莊園の研究」は、この困難を克服しやうとする試の第一歩である。

本書の内容は、前篇と後篇とに分れて居る。前篇は「東大寺領」と題し、先づ前篇をまとめるに際し史料として取扱はれた東大寺文書の解説を掲げ、次いで伊賀國玉瀧莊、美濃國大井莊、美濃國萬部莊、播磨國大部莊、伊賀國黒田莊に關し、成立の問題、統制の問題、貢納の問題、莊民の問題等を、史料に則して詳細に論じて居られる。後篇は「二三の莊園と莊民」と題し、著名な家領の傳領に就いて論究した三つの論考を収め、次いで伊賀國黒田莊、山城國宇治田原莊、近江國大浦莊、近江國伊香立莊等に於て展開された莊民の生活を叙述し、最後に莊園の「兵士」以下の特殊な問題に關する論考を収めて居られる。

本書の前篇が成るに就いて、如何に多大な努力が拂はれたかは、單に東大寺に所藏されて居る東大寺文書ばかりでなく、又方々に所藏されて居る東大寺文書をも採訪し、史料の蒐集に遺漏なきを期せられたことから推測出來やう。従つて論考が極めて正確であることは、言を俟たないところである。而かもその論考は、單なる史料の羅列に止るものではなく、國史全般の進展に對する著者の見解を通じて、個々の史料を生かし、且つ史料の足らざるところを補足しやうとして居られる。この態度は、確かに本書の一つの特色として擧げられる點である。かくて、記録莊園券契所の設立、後白河院の院政の確立、源賴朝の制覇、承久役、建武中興等が、莊園に及ぼした影響を論じて居られる箇所は、最も興味を